

令和3年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(総合型選抜)

課題論文

(地域学部 地域学科 国際地域文化コース)

(注意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は3ページ、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚である。
指示があってから確認すること。
3. 解答は解答用紙(横書き)に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子及び下書用紙は必ず持ち帰ること。

次の資料は、坂倉杏介「生きられる場——日常実践の聖性をめぐって」（アートミーツケア学会編『生と死をつなぐケアとアート——分かたれた者たちの共生のために』第3章）からの抜粋である。これを読んで、以下の問いに答えなさい。

問1 著者の主張を200字以内で要約しなさい。

問2 資料の中で紹介されている、日本的「共同体」やコミュニティの有りようについて、文化的観点を踏まえつつ、あなたの考えを800字以内で述べなさい。

日本的「共同体」の基層

哲学者の内山節は、群馬県上野村の山村で自身が数十年間暮らした体験に基づき、日本古来の個人と社会とのつながりには、欧米のコミュニティの分析概念では捉えきれない固有の特徴があり、地域差はあるもののそれが日本の「共同体」の基層をなしていると述べている(注1)。内山によれば、日本の共同体とはまず欧米のように人間社会の中だけにとどまらず、「自然と人間の共同体」であり、さらに、「生の世界と死の世界を統合した共同体」でもある。そしてそれが「自然信仰、神仏信仰と一体化された共同体として形成されていた」という。

この根底にあるのは、自然も人間も生命活動を行う存在であり、人間は集落を取り囲む山々のなかから生まれ、死ぬことでまたそこへ還っていくという世界観だ。国土の95%近くが森林である日本では、こうした自然との関係、そしてそのなかに神々をみる自然信仰は、ある程度共有される原風景とあっていいだろう。「自然と人間の共同体」であるということは、自分たちの先祖もまた、取り巻く自然のなかに存在しているということである。自然を含めたコミュニティとは、死者も含み込んだコミュニティにほかならない。自治や祭礼の仕組み、相互扶助の仕組みは、自然・死者・人間というシステムのなかで機能しており、そこでは、現在生きている個人の損得とはまったく異なる価値観が働いている。そして、自然と人間を対峙させ、人間同士の結合を主に問題とする西欧的コミュニティ概念とも異なる、共同体に対する特有の根本感覚とあっていいだろう。

内山の主張するように、こうした感覚が日本全般の特有であるといっただけのよいのか、また西欧の中世以前のコミュニティ感覚とどれほど違うのかについては、ここでは判断できない。しかし、こうした根本的な共同体の感覚をいま改めて見直すことが、経済、環境、関係規範など様々な領域で行き詰まりをみせている社会のこれからを描くために必要となるという指摘は重要である。コミュニティの基層にある根本的な感覚とは、生者の世界を自然＝死者の世界が取り囲んでいるという二重世界的な世界観であり、今後の社会デザインのためには、こうしたコミュニティの基層を検証し、未来のために活かすことが不可欠であろう。なぜなら、都市のコミ

コミュニティの現場にいると実感できるのだが、現世に閉じた損得勘定や辻褃あわせの関係づくりでは、持続可能な都市コミュニティは成り立ち得ないと思われるからである。そうした関係を越えた、ともに生きられる場をひらくことが不可欠なのである。

講——都市の信仰コミュニティ

では、こうしたコミュニティを、現代の都市に生み出すにはどうしたらよいだろうか。かつての農山村のように同じ土地に生まれたわけでもなく、また一生関わり続けながら生きていくのでもない現代の人々が、なんらかのかたちで生命的なコミュニティを取り戻すには、どのような方法があり得るだろうか。

内山は、農山村に加えて、近世の都市における共同体のあり方を紹介している。講に代表される少人数の集団による都市型コミュニティの形成である。(中略)すべてを現代の都市に転用できるわけではない。けれども、農村から離れた人々が営んでいた助け合いの仕組みは、現代のコミュニティ形成のヒントになる。

江戸時代、講のなかでも最も数の多かったのは、富士講だったようだ。次に、善光寺講、伊勢講と続く。これらは、20～30人のメンバーを持つ霊山信仰の集団である。毎年一人が代表して、富士山や善光寺にお参りに行く。(中略)

興味深いのは、こうした講が、単に信仰集団なのではなく、娯楽集団でもあり、助け合い集団でもあったということだ。例えば富士講は、代表の旅費1両をメンバーが出し合い、全員が参拝したことにする、という信仰の儀礼である。しかし実際は、代表の一人が自分の1両を使ってお土産を買い、それをメンバーで楽しむという娯乐的なサークルでもあったようだ。(中略)単に信仰や助け合いという目的だけではなく、遊びという要素も含めたコミュニティである。もちろん、誰かが困ったときにはお互いに助け合う仕組みとしても役割を果たす。信仰と同時に娯楽でもあり助け合いでもあるという講のマルチロール(注2)な性格は、現代の都市コミュニティにとっても大きな手がかりになるのではないか。では、現代に生かすために、講からどのような特徴を学べるだろうか。

まず、楽しくて役に立つという機能的な側面が挙げられるだろう。多様性と複雑性の増した都市生活では、農村のように全員一律の義務的参加は現実的ではなく、また死後の幸福のために奉仕を重ねることも難しい。現世においても実際に役立ち、楽しめる側面があるということは、現代におけるコミュニティの活発な運営にとって重要なポイントである。

また、講の持続的な関係性も重要である。金銭が介在としたとしても、その場限りで取引が終わるのではなく、互いの関係は継続する。したがって、自分だけが一時的に得したり、不正によって儲けようとしたりするのではなく、共存共栄のために、時には寄付したり、譲り合ったりというふるまいが自然に生まれる。それが、長い目で見たときのコミュニティのなかでの

信用や発言力につながりもするのである。

さらに、より重要なのは、機能性と継続性だけではなく、そこに常識・世俗を超える価値観が共有されていることである。講は信仰心を共有した関係だが、宗教に限らず、何か人知の及ばないもの、自分たちの能力ではコントロールできない「聖的なもの」に触れている感覚が、損得勘定を超えた相互扶助や利他的な関わりを自然に誘発させるのではないだろうか。何らかの常識的・世俗的な関係や思考を超越したものに触れることによって、コミュニティ内の利害関係や感情から一旦離脱し、ともにいられる別のモードがひらかれる。

聖的なものとは、すなわち世俗的世界の外部といってよいだろうが、こうした外部性について、社会保障の観点からコミュニティを研究している広井良典は、地域コミュニティが維持されるには、「外部にひらかれた中心」が不可欠だと論じている。具体的にそれらは、宗教施設、学校、商店街、自然、医療福祉施設であることが多いという。すなわち、宗教施設は彼岸や死者の世界へ、学校は学問という新しい知識へ、商店街（＝市場）は異国の文化へ、自然は人間の世界の外側へ、医療福祉施設は病や障害という日常的世界の外部へ向けて、自分たちのコミュニティからその外部へひらかれた「窓」のように機能する拠点なのである。それゆえそこは、自分たちだけの閉じた常識的・世俗的価値判断の通用しない場となる。だからこそ、逆説的に、そこに利害を超えた共同性が生じるのである。

楽しく役に立ち、その場で終わらないことのほかに、自分たちの外側にある価値観にひらかれていること。すなわち、二重的世界の向こう側が想起され、「聖的なもの」に接続される「窓」がひらかれたような関係性が、コミュニティの生成に不可欠なのである。

（注1）内山は欧米の community とは異なる背景を持つことから「共同体」という語を用いているが、本論では一般的には「コミュニティ」という語を使用し、日本固有の特徴を持つコミュニティについて「共同体」と表現する。なお、ここでコミュニティは、基本的に「地域コミュニティ」を指す。

（注2）マルチロール (multirole) : 「多機能 [任務] をもった」の意味 (『プログレッシブ英和中辞典』第5版を参照)。

【出典】アートミーツケア学会編『アートミーツケア叢書2 生と死をつなぐケアとアート——分かれた者たちの共生のために』(アートミーツケア学会、2015年)。

※適宜、ルビを付す、などの改変を加えた。なお、(注1)は原注に付された説明文。また原注に挙げられている内山節氏・広井良典氏の著書名は割愛した。(注2)は出題者による補足説明。